

事後評価報告書  
(日本-ドイツ研究交流)

1. 研究課題名: 「能動的自然視条件での視覚情報処理におけるトップダウン的影響の効果: 視覚経路における多領域大規模並列神経活動データ計測とその多角的解析」

2. 研究代表者名:

日本側: 大阪大学 大学院生命機能研究科 准教授 田村 弘

相手側: Institute of Neuroscience and Medicine (INM-6), Institute for Advanced Simulation (IAS-6), Vice director Sonja Grün

3. 総合評価: A

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

ドイツ側の神経統計学者と日本側の神経生理学者が共同で研究立案を行い、初期段階より共同でデータ解析、さらには、研究の進展に伴った実験計画の変更を議論することによって、相互作用により、神経統計学とシステム神経科学を融合させたシステム神経統計学という新分野を開拓できたことは評価できる。

一方、共同研究の成果が学術論文の掲載につながらなかった点が残念である。実験計画についても、当初計画によるものと異なるものが行われたようであり、研究実施に伴い変更はあって当然であるものの、当初計画時の見込みが不十分であったと考えられる。

(2)交流活動の評価について

日独の参加研究者が互いの研究機関を訪問し、また、日独の大学院生が相手方研究機関に中長期滞在するなどにより、国際交流が実質的に行われたことは評価できる。しかし、日本側が単なるデータの提供元にとどまっているようにも見受けられ、今後はより有機的な共同研究が行える枠組みを作る必要があると思われる。

(3)その他

作成されたビッグデータプラットフォームが、論文公表などの後に、公開されることを期待したい。